平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28Ｋ14	氏　名	只野　香苗
研究主題 ―副主題―	コミュニケーション能力の素地を育てる小学校外国語活動の授業づくり ―ロッテルダム日本人学校の授業実践を手掛かりに―		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	渡辺　貴裕
所属校	中野区立緑野小学校	校長	駒崎　彰一

キーワード：小学校外国語活動　コミュニケーション能力の素地

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

小学校外国語活動の授業づくりをする際に、各学校で一定の「型」を提示し、それにのっとって授業を進めるという「〇〇小外国語授業スタンダード」を作成することがある。また多くの授業ではゲームやアクティビティを経てインタビューやスピーチなどをする活動が盛んに行われている。

もちろん､英語力に自信のない小学校教員が多く、具体的なイメージやモデルとなる授業の蓄積が少ないという現状では､「スタンダード」や教員研修での提示の価値はある。アクティビティやゲームで児童が楽しさを感じながら英語を聞いたり声に出したりしながら表現に慣れ親しむことやインタビューやスピーチ活動を通して発話させるという活動はとても重要である。

しかしその一方で､「スタンダード」があるがゆえ、教員がそれに依存し、前例として示されたアクティビティをやるだけで良いと考えてしまう傾向もある。実際の授業で、児童がゲームやアクティビティの中で言葉をゲームに勝つためだけの道具として乱暴に扱う場面や、定型文を暗唱してそれを反復するだけのやりとりをコミュニケーションとしている場面も散見される。果たしてこれらの授業は、小学校外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の素地を養う」ことに迫れているのだろうか。児童の「コミュニケーション能力の素地を養う」授業において、その活動の内実は、どのようなものなのだろうか。そこで、児童はどのように学ぶのだろうか。またそれを引き出すには授業者がどのような働き掛けをすれば良いのだろうか。

以上の問題意識に立ち、本研究では、小学校外国語活動授業における授業者の働き掛け、児童の活動や学びの様相とともに、そこでのコミュニケーション活動の内実を実践に即して明らかにする。そこで得られた知見をもとに、小学校外国語活動の授業づくりを見直すことを目的とする。

２　研究の内容・研究の方法

本研究では、コミュニケーション能力の素地を育てるという点で示唆的な実践が行われているオランダ・ロッテルダム日本人学校の英語授業実践を取り上げる。筆者は、2011～2014 年にかけて当校での勤務経験があり、そこで児童が着実に英語を聞く力・話す力を伸ばしていく姿を間近で見てきた。その中で、この英語授業にこそ「コミュニケーション能力の素地を養う」という目標に迫る、授業者の働き掛けと児童の学びの特徴があるはずだという予想を立てた。そこで、当校で行われている授業を観察し、そこで起きた出来事について分析と解釈を行い、そこから見いだせる要素について考察することとした。

2016 年５月と９月に当校を訪問し観察した授業実践を手掛かりに分析をすすめた。筆者は５月に低・中学年の授業を２コマずつ、高学年の授業を１コマずつ観察した。９月の再訪問の際は低学年の 20 分授業を７コマずつ、第５学年 45 分授業２コマ、第６学年 45 分授業４コマを観察した。また９月には、授業づくりや授業での場面について授業者である Nguyen にインタビューを実施した。記録はフィールドメモ及びビデオでの撮影、録音により行なった。

３　研究の結果

本授業実践から見出されたものは以下の通りである。

(1) 授業のベースとなる安心

授業からは児童にとっての二つの安心が見て取れる。一つは「ここならできる」という心理的な安心、もう一つは「これならできる」という認知的な安心である。

授業者が児童の実態を把握し、それを受容して児童に寄り添い指導をすることにより、児童は「この場ならできる」という心理的な安心を得られ、それが「やってみよう」というコミュニケーションを図る意欲や態度の育成へとつながっていることが分かる。

また、授業者は、児童が何を学ぼうとしているのかを見取り、手だてを提示している。授業者が児童の実態に合わせた英語使用を提示することで、児童は「これならできる」という認知的な安心を得ることができていることが分かる。

⑵ 児童との即興性のある対話

本実践には、児童の反応や状況に応じた即興性のある対話の機会が多くあることが分かる。ここで言う対話とは、授業者のみが「正解」をもつ内容ではない、児童が発信することによって初めて成立する双方向性のあるやりとりのことである。児童にとって自分の発話が受け入れられた上で、授業者から新しい反応がかえってくる活動となり、自分が受容されていることを感じながら、新しい表現を学ぶ機会となる。授業者は、児童の発話を捉え、その内容のみならず心情やその児童のもつ背景も合わせて考慮し発話を返している。これは、授業者が児童に発話させるために英語を練習させるものでも、児童が受け身的に覚えた言葉を言わされるものとも異なる、意味のあるやりとりである。

⑶ 授業設計

以下の三つの特徴が観察された。

ア　児童の実態に応じた一定水準の課題設定

課題は固定しているものではなく、児童の実態に沿いながら一定水準のところで推移する。その学習課題には、児童にとって理解できる表現事項はもちろん、理解可能ではあるが完全には習得していない文法や表現事項も含まれる。それら高水準の課題に対して、授業者は児童の学習実態に応じた適切な助言やジャスチャー等の非言語的な助けも提示したりして、学習者の理解と課題の達成を促している。

イ　文脈の中での英語使用

日常のコミュニケーションはその時の相手や会話の流れにより、使う言葉や表現を臨機応変に選択しなければならない。本実践の場面は、そういった日常に近いと言えよう。

ウ　多方向に展開するコミュニケーション活動

授業者と学習者一対一の対話が、全体や他の児童同士のコミュニケーションに広がっていることもこの授業の大きな特徴であろう。ある児童に対する授業者の指導が周囲の児童にとっても新たな英語表現の獲得につながる場面も多い。

（４）本実践から見出した各要素の相関

本実践から見出した要素は、授業のベースとなる「安心」、「即興性のある対話」、「授業設計」という三つの観点に分類される。これらは、例えば、授業が「安心」ベースだからこそ即興性のある対話や高度な課題を含む授業設計を可能にしているというように、それぞれが独立して存在するのではなく、授業の中で相互に作用し合い高め合っていく関係にある。

４　研究の考察

これらの視点を国内での授業づくりの文脈において考えてみたい。

国内でも、外国語活動の授業を児童にとって安心の場にすることが必要である。言葉を学ぶ上では、自分の語学力でもその場にいられるという被受容感・安心感と的確な言語技能の保証が必要である。

また、コミュニケーション活動においては、覚えた表現の反復だけではなく、必要性のある双方向のやりとりを展開することが望ましい。児童のつぶやきや発話に質問したり同意したりそこに話題を加えたりしながら、日常に近いコミュニケーションを作り出すことが大切だと考える。その対話の中でたくさんの英語を聞かせることにより、児童は外国語の音声や表現に慣れ親しむことができる。

最後にアクティビティの扱いである。アクティビティ自体は児童が楽しみながら体験が技能習得に結びつく手法である。授業づくりをする上で、アクティビティを楽しく参加しながら英語を使い表現できる場、対話の場として設定することが必要である。

国内においてもこのような授業実践を積み重ねることにより、学習指導要領に示された「コミュニケーション能力の素地を養う」という目標に迫ることができるはずである。

５　今後の展望

本研究で挙げた観点は、ゲームやアクティビティありきではない授業づくりの新たな視点となる。コミュニケーション能力の素地を育てることを目指し、国内での授業づくりに三つの観点を取り入れる。

また、これらの観点は、英語教育における教員資質向上のための枠組みにもなり得る。教員研修プログラムの開発や実施に活用する。